

『平家物語』諸本における女人往生記述を俯瞰する (付 対照表)

森, 誠子
九州産業大学 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/4402938>

出版情報 : 文献探究. 58, pp.1-10, 2020-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

『平家物語』諸本における女人往生記述を俯瞰する（付 対照表）

森 誠子

一 はじめに

中世における女人往生についての研究は、文学分野のみならず、宗
教史・思想史をはじめ民俗学や芸能分野など、あらゆる分野で研究の
組上に上げられ、その研究の蓄積は膨大である。その中でも、先行研
究を概観するに、『平家物語』に描かれる女人往生、特に、祇王・祇
女・仏・閉及び建礼門院の往生の記述について、個々に取り上げられ
ることが圧倒的に多いように思われる。そのため、『平家物語』全体
から女人往生の記述を論じたものは多いといえず、主なものとして、
覚一本を中心に考察した服部幸造氏（1）、延慶本を中心に考察した横
山知恵氏（2）及び朴知恵氏（3）の論が確認される。

先般、稿者は「『平家物語』は女人往生をどのように描いているか」
という題目で執筆する機会を得た（4）。覚一本・延慶本という、『平
家物語』研究において重要視されてきた一本における女人往生につい
ては、先学によりその特徴が明らかにされてきたため、拙稿では、多
様な諸本を持ち多様な女人往生を記す『平家物語』について、諸本を
俯瞰的に見ることによって、その表現特徴の一端を捉えた。しかし、
紙幅の都合上、具体的にその根拠となる本文を取り上げるまでには至

らなかつた。加えて、原稿執筆に際し、事前に行った研究会発表で（5）、
『平家物語』における女人往生の記述を一覧できる資料の貴重性につ
いて評価が得られたことも、本稿を成す一因である。

そこで、本稿では、平家にまつわる文芸テキストの展開の一樣相を
解明するための一助として、『平家物語』諸本に記される女人往生の
言説を、人物・場面ごとに突き合わせられるようにしながら整理して
いきたい。なお、本稿は、『平家物語』諸本の言説を等価に並べるス
タンスをとるものであるため、その配列意図は、諸本の前後関係や、
各本の全編の特徴を追究しようとするものではないことを、ご了承い
ただきたい。

二 『平家物語』における女人往生概観

先行研究をもとに、『平家物語』に登場する女人のうち、往生した
と指摘されるものについて、便宜上、覚一本における登場人物順に、
一部はグループとしてまとめつつ、AからIの記号で表すと、以下の
通りである。

A 祇王・祇女・仏・閉

B 鳥羽刑部左衛門妻母（袈裟御前の母）

C 小督

D 皇嘉門院

E 宇佐神宮神官娘

F 巴

G 千手前

H 建礼門院

I 阿波内侍・大納言佐

次に、対象とした『平家物語』諸本は、以下の通りである。なお、後掲の「表」における各本の略称を、墨付き括弧内に一文字で示す。

◎語り本系

〔一方系〕覚一本【覚】 流布本【流】

〔覚一本周辺の本文〕平仮名百二十句本【百】

屋代本【屋】

〔八坂系〕中院本【中】

◎読み本系

延慶本【延】

長門本【長】

四部合戦状本【四】

源平

盛衰記【盛】

それら各本の記述内容を一覧にしたものが「表」である。異同の結果については、以下のような記号で示した。

○ 往生したことを示す記述があるもの

△ 臨終の記述があるも往生を示す記述が無いもの

▲ 臨終についての記述が無いもの

× 当該箇所の記事が無いもの。ただし、F（巴）については【屋】は欠巻。

〔表〕

【盛】	【四】	【長】	【延】	【中】	【屋】	【百】	【流】	【覚】	
○	○ (※2)	×	○	○	○ (※1)	○	○	○	A
○	×	○	○	×	×	×	×	×	B
▲	×	▲	○	▲	▲	▲	▲	▲	C
○	×	○	○	×	×	×	×	×	D
×	×	×	○	×	×	×	×	×	E
○	▲	▲	▲	▲	×	▲	▲	▲	F
▲	▲	▲	▲	▲	▲ (※1)	○	△	○	G
○	○	○	○	○	○	○	○	○	H
○	▲	▲	▲	▲	▲	▲	○	○	I

(※1) 屋代本は「抜書」による。

(※2) 四部合戦状本は「平家族伝抄」による。

三 『平家物語』における女人往生に関する表現について

〔凡例〕

* 『平家物語』の底本は以下の通り。

【覚】 日本古典文学大系

【流】 『平家物語 改訂版』梶原正昭校注（おうふう、一九九五年）

【百】 新潮日本古典集成

【屋】 『屋代本 高野本 対照 平家物語』（新典社、一九九〇～九三年）

【中】 『校訂 中院本平家物語』（三弥井書店、二〇一〇～二〇一一年）

【延】 『延慶本 平家物語 本文篇』（勉誠社、一九九〇年）

【長】 『長門本 平家物語』（勉誠出版、二〇〇四～〇六年）

【四】 『訓読 四部合戦状本平家物語』（有精堂出版、一九九五年）
なお「祇王」に関しては「平家族伝抄」『四部合戦状本 平家物語』（汲古書院、一九九七年）

【盛】 卷四二まで『源平盛衰記』（三弥井書店、一九九一～二〇〇五年）

卷四三から『源平盛衰記』（国民文庫刊行会、一九〇九年）

A 祇王・祇女・仏・閉

【覚】 四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、よねもなくねがひければ、ちそくこそありけれ、四人のあまども皆往生のそくはいをとげけるとぞ聞えし。されば後白河の法皇のちやうがうだうのくはこちやうにも、祇王・祇

女・ほとけ・とぢらが尊靈と、四人一所に入られけり。あはれなりし事もなり。（巻一）

【流】 四人一所に籠り居て、朝夕佛前向ひ、花香を供へて、他念なく願ひけるが、遅速こそ有（り）けれ、皆往生の素懷を遂（げ）けるとぞ聞えし。されば彼の後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、妓王・妓女・佛・とぢ等が尊靈と、四人一所に被_レ入たり。難_レ有かりし事も也。（巻一）

【百】 四人一所にこもりゐて、朝夕仏のまへに花香をそなへ、余念もなくねがひければ、遅速こそありけれども、四人の尼どもみな往生の素懷をとげけるとぞ聞えし。されば後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「義王、義女、仏、とぢが尊靈」と四人一所に入れられけり。あはれなりしこともなり。（巻一）

【屋】 一庵室ニ閉籠リ、日夜朝暮ニ不_レ懈、花香ヲ備へ、一心ニ弥陀ヲ念シケレハ、遅速コソ有ケレトモ、四人ノ尼共、遂ニ往生ノ素懷ヲ遂ケルトソ聞ヘシ。入道相国仏御前ヲ失テ、手ヲ分テ被_レ尋ケレ共無リケレハ、「一定入道カ仏ハ、天狗ニ被_レ取タリ」トソ宣ケル。遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、「左様ニ思立テ浮世ヲ厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不_レ及」トテ、其後ハ尋モ無リケリ。サレハ後白河法王ノ長講堂ノ過去帳ニ、「義王、義女、仏、閉等ガ尊靈」ト、四人一所ニ入セ給ケリト聞ヘケルソ忝ナキ。（抜書）

【中】 四人ひとつあんしつに念仏して、たかひにわうしやうをいのりけるに、ちそくのふたうこそありけれども、つゐにわうしやうのそくわいを、とけらるとそうけたまはる、入道

仏をうしなひて、手にてをわけてたつねさせられけれどもなかりけり、しやうかいほとけはあまりに見めよかりつれば、てんくかとりたるにこそこのたまひける、其後やゝありてきゝいたされたりけれ共、さやうになりたらんするものをはとて、たつねられさりけり、かのちやうかうたうのくわこちやうにも、きわうき女仏とちらかゆうれいと、入られけるとそうけ給はる、あわれなりし事ともなり(卷二)

【延】隔テナク四人一所ニ勤メ行ヒテ、終ハ仏道ヲ遂ニケリ。サテコソ、後白河法皇ノ長講堂ノ過去帳ニハ今モ、「義王、義女、仏、閉」トハ読レケレ。(第一本)

【長】×

【四】四人尼公達此入道殿依ニ情縁ニ入ニ釈尊四部御弟子數ニ弥勤ニ称名念仏ニ祈ニ静海聖靈成仏得道ニ其後亦元暦二年_{乙未}年三月廿四日壇浦軍破平家一門皆亡時云ニ過去帳ニ作レ物念仏廻向折筋奉ニ訪平家御一門頓證菩提同蓮成仏ニ其後不レ久文治五年二月彼岸中日十五日義王与レ仏同時遂ニ往生ニ其後亦不レ久建久元年八月彼岸中日十四日母杜持与ニ娘義女ニ亦同日異時遂ニ往生ニ乃往過去約束何許契四人尼公達為ニ一室勤行同法ニ難レ有遂ニ往生ニ彼等成ニ往生時ニ晴天紫雲霞雲上音澄登亘山巖軒半仏壇不ニ云知ニ花共多雨敷五障女人誰可レ云雖ニ末代ニ信受称名故遂ニ往生ニ預ニ聖衆来迎ニ三徒苦何疑レ之雖ニ堯季ニ乘ニ觀音花台ニ被ニ勢至授手ニ為ニ末代女人ニ一匝レ有先規(族伝抄)

【盛】此尼上達四人、往生ノ志深シテ、行業功重リケレバ、遲速コソ有ケレ共、本意ニ任セ、終リ不レ乱念仏シテ、西ニ聳雲ニ乘、池ニ開ル蓮ニゾ生ケル。後白川法皇此由聞召、哀ニ

貴事ナリトテ、六条長講堂ノ過去帳ニ被レ入テ、「比丘尼祇王廿一、祇女十九、閉四十九、仏十七」ト、今ノ世マデモ読上訪御坐ス事コソ憑シケレ。大安寺ノ過去帳ニモ入ト云。

(卷一七)

B 鳥羽刑部左衛門妻母(袈裟御前の母)

【覺】×

【流】×

【百】×

【屋】×

【中】×

【延】其後ハ天王寺ニ參テ、「只ハヤ命ヲメシテ、淨土ニミチビキ給ヘ。我仏ニナリテ、ナキ人ノ生所ヲモ求メツ、一仏蓮台ノ上ニ再行アワム」ト祈念スルコトナノメナラズ。サル程ニ次年ノ十月八日、生年五十五ニシテ終ニ往生ノ素懷ヲ遂ニケリ。(第二末)

【長】其後は、天王寺にまいりて、「たゝはやく命をめして、こく樂にみちひき給へ。仏たうなりて、こしやうをももとめつゝ、一はちすの中にさいくはいをとけむ」と、祈念する事をこたらさるほとに、いのる祈やみてぬらん、次の年の八月八日、しやううねん四十五にて、往生のそくはひをとけにけり。(卷一〇)

【四】×

【盛】其後母ハ尼ニナリ、天王寺ニ參籠シテ、「唯疾命ヲ召シ淨土ニ導給ヘ。救世觀音太子聖靈、解ヲ開テ無人ノ生所ヲ求メ、一仏蓮台ノ上ニシテ再ビ行合ハン」ト祈念シケレバ、

次ノ年十月八日、生年四十五ニテ目出キ往生ヲ遂ニケリ。
(卷一九)

C 小督

【覚】小督殿をとらへつゝ、尼になしてぞはなつ「たる」。小督殿出家はもとよりの望なりけれ共、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつれはてて、嵯峨のへんにぞすまれる。うたてかりし事共なり。(卷六)

【流】何としてかは謀り出されたりけん、小督殿を捕へつゝ、尼に成(し)てぞ追放たる。歳二十三、出家は元より望(み)なりけれども、心な(ら)ず尼に被^レ成、濃(き)墨染に裏果(て)、嵯峨の奥にぞ被^レ栖ける。無下にうたてき事ども也。(卷六)

【百】小督殿をたばかり出だして、尼にぞなされける。出家は日ごろより思ひまうけたる道なれども、心ならず尼になされて、年二十三にて、濃き墨染にやつれつゝ、嵯峨の辺にぞ住まられる。

【屋】小督殿ヲタハカリ出シテ、尼ニソ成サレケル。出家ハ日来ヨリ思儲タル道ナレトモ、心ナラスニニナサレテ、年二十三、コキ墨染ニヤツレツゝ、嵯峨ノ方ニソスマレケル。(卷三)

【中】なにとしてかたはかりいたされたりけん、こかうのつほねをとらへつゝ、あまになしておひはなつ、出家はもとよりおもひまうけしみちなれ共、心ならずあまになされて、年廿三、こきすみそめにやつれつゝ、大はらのおくにそすまはれる(卷六)

【延】自ラカミヲシ切テゾステ、ケル。小督局心ナラズ尼ニナサ

レテ、口惜トモ云計ナシ。「哀、嵯峨ニテ思立タリシ時、大原ノ奥ヘモ尋入テ、吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ可有ニ、無由ニモ再被召帰ニテ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」ト歎給ヘドモ、甲斐モナシ。ヲシカラヌ命ナレバ、水ノ底ニモ入ナムト思立給ヘドモ、サキニモ人ノ云シ様ニ悪道ニ墮ム事、心憂ク覚ユレバ、「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナレバ、浄土ヲユソ願ハメ」トテ、終大原ノ二分入テ、柴ノ庵ヲ結ビ、一向念仏シ給ケリ。露モ怠ル事ナク明シ暮シ給シガ、齡八十二ニテ、日来ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ、往生ノ素懷ヲ遂給フ。(第三本)

【長】かみを切、あまになし、みゝをきり、はなをそきてをひはなつ。「入道、人倫の法としてなさけなくもし給たり。つみのふかさよ」と、人あさみ申て、たもとをしほらぬはなかりけり。さても小河の局、いかになり給ぬらんと、おもひやるこそむさんなれ。(卷一一)

【四】×
【盛】新尼御前ハ、出家ハ本ヨリ思儲シ事ナレ共、アエナク人ニ姿カヘラレテ、イカナル事ヲカ被^レ思ケン。サシテ行ベキ方モオボエネバ、泣々嵯峨ヘ帰給フ。シバノ愛ニ御座ケルガ、後ニハ大原ノ別所ニ閉籠リ、行澄シ給ケリ。御年廿三歳、シカルベキ形ナリ。(卷二五)

D 皇嘉門院

【覚】×

【流】×

【百】×

【屋】×

【中】×

【延】十二月三日、皇嘉門院失サセ給ヌ。御年六十。是ハ法性寺

ノ禪定殿下ノ御娘、崇徳院ノ后ニテ御マシキ。院讚岐へ被
遷_レ御マシ、時ノ御物思ヒ、何計ナリケム。思遣コソ哀ナレ。

命ハ限アリ。思ニハ死又習ナレバヤ、即御出家有テ、一向

後生菩提ノ御宮ヨリ外ハ、他ノ行マシマサバリケレバ、院

ノ御菩提ノカザリトモナリテ、吾御身ノ得道無疑_レ随テ、兼

テ時覚ラセマシ_レテ、最後ノ御有様目出ク、仏前ニハ異

香アリ。御善知識ハ、大原来迎院ノ本浄房堪慶トゾ聞ヘシ。

昔ノ御ナゴリトテ残給タリツルニトオボヘテ哀也。(第三

本)

【長】十二月三日、皇嘉門女院うせさせ給ぬ。御とし六十一。こ

れは法性寺の禪定殿下の御娘、崇徳院の後、院讚州へうつ
されまし_レし時の御物思、いかはかりなりけむ。おもひ

やるこそあはれなれ。命かきりある御事にて、思ひにはし

なれぬなれば、やかて御出家ありて、一向後生ほたいの御

いとなみよりほかは、他事おはしまさ_レりければ、院の御

ほたいの責ともなり、我御身の御得道もうたかひなし。し

たかひて、時をおほえさせ給て、さいこの御ありさまめて

たく、仏前に異香あり。御善知識には、大原来迎院の本成

房湛敬とぞ聞えし。むかしの御なこりとのこらせ給ひた

りつる、とおほえてあはれなり。(卷二三)

【四】×

【盛】十二月三日、皇嘉門院隠レサセ給ヌ。御年六十一。是ハ崇

徳院ノ后ニテ御坐キ。御善知識ニハ大原ノ別所来迎院ノ本
願坊湛快ゾ参給ケル。閑ニ最御目出クテ終ラセ給ケルゾ貴

キ。昔御遣トテ是計コソ残ラセ給タリケルニ、世ノ習トテ

哀ナリ。(卷二七)

E 宇佐神宮神官娘

【覺】×

【流】×

【百】×

【屋】×

【中】×

【延】サレドモ、ヤガテ御イトマヲ給ワ_レテ、罷出ケレバ、清水

寺ニ参テ、出家シテ、真如ト名ツケケリ。「過去帳ニ入ム」

ト云ケレバ、戒師云ク、「過去帳ト申ハ、昔ガタリニナレ

ル人ノ入ル札ナリ。現在帳カ」ト云ケレバ、真如、

アヅサユミ遂ニハヅレヌモノナレバ無キ人数ニカネテ

入ルカナ

戒師哀ガリテ入レニケリ。此和歌ニヨ_レテ、其後ハ過去真

如トイワル。遂ニ別ノ男ニ合ズシテ、往生ヲ遂ト云ヘリ。

今生後生之宿願、思ノ如シ。(第四)

【長】×

【四】×

【盛】×

F 巴

【覺】とも多そのなかへかけ入、をん田の八郎におしならべ、む

ずとと(〇)てひきおとし、わがの(〇)たる鞍のまへわにをし
つけて、ち(〇)ともはたらかさず、頸ねぢき(〇)てすてて(〇)
げり。其後物具ぬぎすて、東國の方へ落ぞゆく。(巻九)

【流】 巴其(の)中へ破(つ)て入(り)、先(づ)御田の八郎に
押ならべ、むずと組(む)で引落し、我(が)乗(つ)た
りける鞍の前輪に推つけて、些も不(レ)動、頸ねぢ切(つ)て
捨(て)てんげり。其(の)後物具脱棄(て)、東國の方
へぞ落行(き)ける。(巻九)

【百】 巴その中に駆け入り、恩田に押し並べて、むずと取つて引
き落し、鞍の前輪に押しつけて、首ねぢ切つて捨ててけり。
そのまま物具脱ぎ捨てて、泣く泣くいとま申して、東國の
方へぞ落ち行きける。(巻九)

【屋】 ×(欠卷)
【中】 ちからをよはず、あはつのこくふんしの御たうの前にて、
物の具しつかにぬきをき、たちはかりをもて、東をさして
おちゆくとも見えし、ゆきかたしらすそなりにける、(巻
九)

【延】 鞆絵ハ落ヤシヌラム、被打シヌラム、行方ヲ不知ナリニケ
リ。(第五本)

【長】 此ともゑは、いかゝ思けん、あふ坂よりうせにけり。のち
にきこえけるは、越後国友相といふ所におちとまりて、
あまに成てけるとかや。(巻一六)

【四】 鞆絵と云ふ女武者も、討たれや為ぬらん、落ちや為ぬらん、
行方を知らず。(巻九)

【盛】 和田合戦ノ時、朝比奈討レテ後、巴ハ泣々越中ニ越、石黒

G 千手前

ハ親シカリケレバ、此ニシテ出家シテ、巴尼トテ、仏ニ奉
花香一、主、親、朝比奈ガ後世弔ケルガ、九十一マデ持テ、
臨終目出シテ終ニケルトゾ。(巻三五)

【覚】 千手前はなか／＼に物思ひのたねとやなりにけん。されば
中将南都へわたされて、きられ給ひぬときこえしかば、や
がてさまをかへ、こき墨染にやつれては、信濃國善光寺に
おこなひすまして、彼後世菩提をとぶらひ、わが身も往生
の素懷をとげけるとぞきこえし。(巻一〇)

【流】 其(の)後、中将南都へ被(レ)渡、被(レ)斬給(ひ)ぬと聞え
しかば、千手の前は中々物思ひの種とや成(り)にけん。聽
て様をかへ、濃(き)墨染(に)寔果(て)て、信濃の國善
光寺に行澄(ま)して、彼(の)後世菩提を吊ひけるぞ哀
れなる。(巻一〇)

【百】 それよりしてこそ千手の前は、いとど思ひも深うはなりに
けれ。されば、「中将、南都へわたされて、斬られぬ」と
聞こえしかば、様を変へ、信濃の國善光寺に、行ひすまし
て、かの後世菩提をとぶらひ、わが身も往生の素懷をとげ
にけり。(巻一〇)

【屋】 其ヨリシテソ千手前ハ、中々ニ思深クハ成ニケル。(拔書)

【中】 千しゆのまへは、いつしか物思ひとやなりぬらん(巻一〇)

【延】 又佐殿、千手ニ問給ケルハ、「中将終夜琵琶ヲ弾給ツルハ、
何ト云樂ニテ有ケルゾ」ト宣ケレバ、「初ハ五常樂、次ニ
皇響ノ急ニテ候シガ、後ニハ廻骨ト云樂ニテ候」ト申。(第
五末)

【長】千寿は、「おもはずに思て、物もおほせられ候はず」と申ければ、佐、うちわらひてそおはしける。(巻一七)

【四】兵衛佐、哀れみ奉り、件の美女を鹿野へ奉りたまひけり。

此の女人と申すは、鎌田兵衛政清が憑みたりし鏡宿の遊女千鶴が娘、千手なり。色有りて情け深き女人なり。尔てこそ頼朝も、多くの人の中に、此の女人を択ばれけれ。敵なれども、是く芳心せられけるこそ珍重しけれ。(巻一〇)

【盛】中将第三年ノ遠忌ニ当リケルニハ、強テ暇ヲ申ツ、千手二十三、伊王二十二、緑ノ髪ヲ落シ、墨ノ衣ニ裁替テ、一所ニ庵室ヲ結び、九品ニ往生ヲ祈ケリ。(巻三九)

H 建礼門院

I 阿波内侍・大納言佐

【覚】かくて年月をすごさせ給ふ程に、女院御心地例ならずわたらせ給ひしかば、中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ、「南無西方極樂世界教主弥陀如来、かならず引攝し給へ」とて、御念佛ありしかば、大納言佐の局・阿波内侍、左右によて、いまをかぎりのかなしさに、こゑもおしまさなきさけぶ。御念佛のこゑやう／＼よはらせまし／＼ければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ。かぎりある御事なれば、建久二年きさらぎの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ。きさいの宮の御位よりかた時もはなれまいらせずして候なれ給しかば、御臨終の御時、別路にまよひしもやるかたなくぞおぼえける。此女房達は昔の草のゆかりもかれはてて、よるかたもなき身なれ共、おり／＼の御佛事營給ふぞ哀なる。遂に彼人々は、龍女が正覺の跡をおひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懷をとげけるとぞ聞

えし。(巻一二ノ灌頂卷)

【流】かくて女院は、空(し)う年月を送(ら)せ給ふ程に、例ならぬ御心地出來させ給(ひ)て、打臥させ給(ひ)しが、日來より思召し設(け)たる御事なれば、佛の御手に被^レ懸たりける五色の絲を磬(へ)つゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如来、本願訛(ち)給はずば、必ず引接し給へとて、御念佛有(り)しかば、大納言の佐の局・阿波の内侍左右に侍ひて、今を限りの御名残の惜(しさ)に、聲々に喚き叫び給(ひ)けり。御念佛の御聲、漸弱らせ坐(し)ければ、西に紫雲鬢き、異香室に滿(ち)て、音楽空に聞ゆ。限ある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期遂に終らせ給(ひ)けり。二人の女房達は、后の宮の御位より附(き)參(ら)せて、片時も離れ參(ら)せずして候はれしかば、別路の御時も、遣方なくぞ被^レ思ける。此(の)女房達は、昔(の)草の縁も皆枯果(て)て、寄(る)方もなき身なれども、折々の御佛事營み給ふぞ哀なる。此(の)人々も、終には龍女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如くに、皆往生の素懷を遂(げ)けるとぞ聞えし。(巻一二ノ灌頂卷)

【百】女院、つひに建久のころ、龍女が正覺のあとを追ひ、往生の素懷を遂げ給ふ。「冷泉の大納言隆房の卿、七条修理大夫信隆の卿の北の方ぞ、最後までも御訪ひは申されける」とかや。(巻一二)

【屋】女院遂ニ建久始ノ比、竜女カ正覺ノ跡ヲ追ヒ、韋提希夫人ノ往生ノ素懷ヲ遂サセ給ケリ。冷泉大納言隆房ノ卿、七条修理大夫信隆ノ卿、此人々ノ北方ソ、最後マテノ御訪ハ被^レ

申ケルトソ承ル。(卷一二)

【中】女院は、いよ／＼御念仏をこたらせ給はずして、つゝに龍女が正かくのあとををひ、いたいけふにんの、わうしやうをともなはせ給けるとそうけたまはる、あはれなりし御事も(卷一二)

【延】先帝ヲ奉^テ始^メ、一門一々都ヲ落テ、西海ノ浪上ニ漂テ、終

ニ海底ニ沈給シ事共、只今ノ様ニ思食出サレテ、弥御歎ツキセズ、「何ナル罪ノ報ニテ、カ、ル憂世ニ生合テ、ウキ事ヲノミ見聞覽。寂光院ニアラマシカバヨソ聞マシカ。指ガ是程目ノ当リハ見聞ザラマシ」トサヘ思食ゾ、責ノ事ト覺テ哀レナル。是ニ付テモ朝夕ノ御行法不怠。御年六十八ト申シ貞応二年ノ春晚ニ、紫雲空ニナタビキ、音楽雲ニ聞ヘテ、臨終正念ニシテ、往生ノ素懷ヲ遂サセ給ニケリ。御骨ヲバ東山鷲尾ト云所ニ奉納ケルトゾ聞ヘシ。今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覺テ、目出ゾ聞ヘシ。昔ノ如、后妃ノ位ニテ渡セ給ハマシカバ、女性ノ御身トシテ、争カハ彼法性ノ常樂ヲ証ゼサセ給ベキト哀也。「源平ノ相論出来テ、災ニ合セマシ／＼ケルハ、偏ニ往生極樂之靈瑞ニテ有ケル物ヲ」トゾ、人申合ケル。サレバ日来ハ自利々他之行業、廻向ノ功力、冥途ニ到テ、御一類モ共離苦得樂、疑ヒ有ジ者哉。(第六末)

【長】平家都を落て、西海の浪の上にとゞよひて、先帝海中にしつませ給ひ、百官悉浪底にいりしこと、只今の様におほしめしけり。「いかなりける罪報にて、うき事をのみ見聞らむ」と、御歎つきせさりけり。されとも、山林の御すまひ、

寂寞の境なれば、おほしめしなくさまるゝ事おほかりけり。峰にならへる梢をは、七重宝樹となそらへ、岩間をつたふ谷水を、八功德水と観しつゝ、春の花、秋の月、山ほとゝきすにたくへても、西ふく風に心をかけ、御とし六十一と申、貞応二年の春のころ、むらさきの雲のむかひを待えつゝ、御往生の素懷を遂させ給けり。一期の御廻向むなしからされは、御一門の人々も、一仏浄土の縁、御疑あるへからず。昔の後妃の位におはしませは、榮耀御心にそむて、御執心もおはしませへし。源平の逆乱に神をくたき、厭離穢土の御心さし、深かりけり。されは、悪縁を善縁として、遂に御本意を成就せられけり。ある人の云、「妙音菩薩の化身におはします」と云々。(卷二〇)

【四】平家の都を落ち、西海の波の上に漂ひつゝ、終に西海の波の底に沈みたまひし安徳天王の御事を、今の様に思食し「合はず」に付けても、弥御歎きも尽きせねば、「何かなる罪の報ひにて、斯かる憂き世に生まれ値ひて、憂き事のみを見「聞くらん」。寂光院に在らましかば、外にこそ聞かまし。目の前にては見聞くまじ」と思「食」さるゝも、責めての事と覚えて哀れなり。之に付けても朝夕の行業怠らせたまはずして、御「年」六十七と申す貞応二年の春の暮、東山の鷲尾と云ふ「処」にて御往生有り。臨終正念にてぞ御在しける。紫雲空に◆(太+しん)によう…(稿者注)き、異香室に薫じ、音楽西に聞こえ、聖衆東へ来たりければ、終に往生の素懷を遂げさせたまふ。今生の御恨みは一旦の御歎きなり。後生成仏の「御」喜びは類無き御事ぞかし。

「善知識は大因縁なり」と「経」文に在るも理かな。形容は咲ふが如くして、端坐して息絶えたまひぬ。則ち是、女人往生の規模は、末代の成仏の hands なりと云々。（灌頂巻）

【盛】平家都を落て西海の浪に漂、先帝海中に沈み給、百官悉亡し事只今の様に覚えて、其愁未やすまらせ給はず、如何なる罪の報にて、露の命の消やらで、又懸事を聞食らんと、不_レ尽御歎打続せ給けるに付ても、朝夕の行業懈らせ給はざりけるが、御歳六十八と申し貞応三年の春の比、五色の糸を御手にひかへ、南無西方極樂教主、阿弥陀如来、本願悞給はず、必引撰し給へと祈誓して、高声に念仏申させ給て引入せ給ければ、紫雲空に聳き、異香空に薫じつゝ、音楽雲に聞ゆ。光明窓を照して、往生の素懷を遂させ給けるこそ貴けれ。二人の尼女房も、遅速こそ有けれ共、皆如_二本意_一、臨終正念に終けり。

泡沫無常の世の習、分段輪廻の里の癖、いづくか常住の所なる。誰も不退の身ならね共、上一人の玉の台より、下万民の柴の枢に至まで、今も昔も類すくなき事共也。されば女院の今生の御恨は一旦の事、善知識は是莫大の因縁なり、昔のごとく后妃の位に御座さば、争か法性の常樂をば経させ給べき、源平両家の諍ありて憂目を御覧じけるは、偏に往生極樂の勝因のきざしけるにこそと、心ある人は皆貴み申けるとかや。（巻四人）

注

- (1) 服部幸造「覚一本『平家物語』における女人往生」『国語国文学』二十三号（一九八二年八月）
- (2) 横山知恵「延慶本『平家物語』の女人往生」『名古屋大学国語国文学』一〇五号（二〇一二年十二月）
- (3) 朴知恵「延慶本『平家物語』に於ける女人往生」『文学研究論集』四十八号（二〇一八年二月）
- (4) 拙稿「『平家物語』は女人往生をどのように描いているか」松田浩・上原作和・佐谷真木人・佐伯孝弘編『古典の常識を疑うⅡ 縦・横・斜めから書きかえる文学史』（勉誠出版、二〇一九年八月）
- (5) 「女人往生は中世文学においてどのように表現されているか」『平家物語』に関連する女人説話を事例として」伝承文学研究会第四五五回東京例会（於学習院女子大学、二〇一八年二月）

附記 本稿は、JSPS 科研費・若手 19K13079「中世期から近世前期における平家物語にまつわる文芸領域及び文化の動態に関する研究」の助成を受けたものです。

（もり さとこ・九州産業大学准教授）